

19世紀パリにおける地方出身者の歴史 -家族・親族・同郷人関係の機能と限界-

著者	國府 久郎
雑誌名	長崎外大論叢
号	16
ページ	45-58
発行年	2012-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000096/



19世紀パリにおける地方出身者の歴史

—家族・親族・同郷人関係の機能と限界—

國府久郎

Histoire des provinciaux à Paris au XIX^e siècle :
Fonctions et limites des relations de famille,
de parenté et de personnes originaires de régions identiques

KOKUBU Hisao

Abstract

Paris a connu une augmentation rapide de sa population pendant le XIX^e siècle. Ce phénomène est la conséquence d'une immigration massive venant de plusieurs régions. Cet article a pour but d'étudier la façon dont les relations de famille, de parenté et de personnes originaires de régions identiques des migrants fonctionnaient efficacement, ou montraient leurs limites pour s'installer dans la société parisienne. À partir de l'analyse comparative de quelques groupes de provinciaux, nous avons pu relever le fait que les caractères de professions choisies par ces groupes ont largement influencé les fonctionnements de leurs réseaux.

はじめに

19世紀のフランスでは、出生率の低下が原因で総人口の増加は緩慢であったが、パリ、マルセイユ、リヨンなどの大都市では、人口が急激に増加した。とりわけ首都の人口は、1801年から1851年の間に約55万人から100万人へと増加し、1860年に周辺の郊外が併合された後は、1901年に270万人にまで達した。この急激な人口増加は、その大半が社会増（地方からの人口流入）によるものであった。19世紀前半のパリは、大量に押し寄せてきた移住者を受け入れることができず、不衛生・疫病の蔓延、貧困・犯罪・自殺などの様々な都市問題や社会問題を引き起こした。19世紀後半に都市改造が行われ、ある程度インフラが整備されるまでは、問題は深刻であった。

こうした19世紀前半の悲惨なパリの状況は、ルイ・シュヴァリエの古典的研究『労働階級と危険な階級』（CHEVALIER 1958、木下 1983）によって詳細に描かれた。しかし、民族学・社会学の影響を受けた1970～1980年代の研究（BARBICHON 1980、GAILLARD 1980、RAISON-JOURDE 1976、YAOUANQ 1980）は、困難な状況においても、移住者は自分たちが築きあげたネットワークで都市社会に適応、定着したことを明らかにした。これらの研究の多くは、特定の地方出身者の集団を取りあげ、その特殊性を強調する個別事例の研究であった。そのため、1990年代以降、徴兵文書や選挙人名簿を大規模に調査したフォールらは、移住者全体でみれば、出身地ごとに集まって住むことはまれであり、同郷人どうしの結婚も少なかったことを実証し、同郷人たちの強力なネットワークを浮き彫りにした研究に修正を加えた（フォール 1999年、FARCY et FAURE 2003）。

日本では近年、フォールらの研究をふまえた長井（2008年、2009年、2012年）の一連の研究におい

て、カトリック教会が移住者の「受け皿」として如何に機能し、彼らの都市社会への統合を助けたのかについて考察されている。地方出身者向けの慈善事業は、カトリック系の同郷会で活動が行われ、宗教教育のほかは就業斡旋、病人の看護、困窮者への施しなどが中心であった。移住者を対象とした事業は、基本的には互助ないし扶助のための組織だった。それが目指したのは、あくまでも個人が出自やその価値観を失わないようにすることであって、地域文化の維持でもなければ、首都の社会に統合されることでもなかった。このような教会関連団体は、移住者の「受け皿」としての機能がある程度は果たしつつも、彼らの言語的・文化的な特殊性に言及することはまれであった。都市における移住者の、地域文化・言語の維持の問題に着目した長井の研究は、パリでは教会は地域文化の擁護者ではなかったと結論を出している（長井 2012年）。

一方、移住者の都市社会への統合の問題に関しては、同郷会の役割よりも、家族や同郷出身者の役割が大きかったことを、地理学者クリビエのライフサイクル調査（CRIBIER 1978）を紹介しながら指摘している。要するに、血縁ないしごく身近な範囲でのネットワークが決定的な役割を果たしていたとのことである（長井 2008年）。

しかしながら、19世紀パリにおける地方出身者の家族・親族・同郷人のネットワークに関しては、上述した1970～1980年代の民族学・社会学的な研究によってもすでに明らかにされていた。フォールや長井が批判するように、確かにこれらの研究の多くは、地方出身者のコミュニティのモノグラフであり、全体への位置づけが欠けていた。また、特定の地方出身者集団の特性を強調して終わりがちであった。それでも、モノグラフを比較することによって、家族・親族・同郷人のネットワークの機能と限界について解明できる点も少なくはないであろう。特にこれまでレゾン・ジュルドの研究や、1980年刊行の雑誌『フランス民族学』に掲載されたパリの地方出身者に関する特集号は、日本ではその成果が十分に紹介されてこなかった。そこで本稿では研究史の空隙を埋める作業として、主にこれらの研究に依拠しつつ、家族・親族・同郷人関係の機能と限界について考察していきたい。

第1節では、都市化と産業化の時代である19世紀フランスの人口移動の特徴とその変化について概観し、第2節でパリの人口吸引力と農村からの人口流出の諸要因に関して概説する。そして第3節において、フランス北西部のノルマンディー地方出身者の家族・親族関係と、中央部の山岳地帯に位置するオーヴェルニュ地方とリムーザン地方出身者の同郷人関係、女中として働いていた独身の女性移住者の家族・親族・同郷人関係を比較しながら、こうしたネットワークの機能と限界を検討する。この比較検討によって、あくまでも集団的傾向であるものの、地方出身者が選択した職業の性質が、家族・親族・同郷人関係の機能が有効に働くか、あるいは限界を露呈するのかに大きく影響していたことが明らかになるであろう。

1. 19世紀：都市化と産業化の時代の人口移動

(1) 19世紀フランスの人口移動の特徴

本節では、第2、3節の考察の前提として、19世紀の西ヨーロッパ諸国、特にフランスの人口移動の特徴について簡単にまとめておきたい。まず、人口移動の研究はフランスでは手薄な分野の一つであったが、1980～1990年代以降、アメリカ人研究者の刺激を受け研究に進展がみられるようになった（SEWELL 1985、MOCH 1992）。従来の研究では、近代化が進むにともない農村から人々が直接、パリなどの大都市へ向けて移動を開始したというのが、19世紀ヨーロッパの人口移動に対する見方で

あった。しかし、こうした19世紀の人口移動をあたかも近代化の兆候であるかのようにみなしたり、比較的新しい現象であるかのようにみなしたりする考え方は、19世紀以前の人口移動に関する研究が進展するにつれて否定された。19世紀以前から人々は山岳地帯と平野の間、農村と農村の間、都市と農村の間をすでに頻繁に移動しており、農村は定住のみの生活ではなかったのである。19世紀の人口移動は、17、18世紀の人口移動が変化していったものに過ぎず、人々の移動は近代化の時代を告げる合図ではなく、むしろ継続的な現象であると現在の研究では考えられている（MOCH 1992）。

また、国勢調査からは把握し難いが、人々は農村から都市へと一方にのみ移動をしていたのではなく、実際はより複雑な移動過程を経ていた。19世紀のヨーロッパでは、多くの人々が都市と農村の間を1回以上は移動しており、世紀半ばまでは、都市での一時的な働き手である場合が多かった。生まれ故郷に帰る者もいれば、故郷の村から地方の中小都市へ移動し、次にパリのような大都市へと段階を経て移動して行く者もみられたのである（CHEVALIER 1950）。

19世紀フランスに焦点を絞ってみると、他の西ヨーロッパ諸国と比較して、国内人口移動の規模の面で大きな違いはないが、フランスだけのいくつかの特徴もある。フランスは18世紀以降の出生率の低下が原因で、西ヨーロッパ諸国の中で、最も低い人口増加率を背景として国内の人口移動が行われた。1801年から1911年の間に、フランスの人口は約2,700万人から4,000万人へと約1.5倍増加したのに対し、ほぼ同期間にイギリスの人口は1,100万人から4,100万人へと4倍も増加した。ドイツの人口は、2,200万人から6,500万人へと3倍の増加であった（國府 2002年）。

19世紀後半のフランスでは、特に1880年代の農業大不況以降、国内全体で都市への人口移動が活発になったが、非常に低い人口増加率を背景として行われた移動は、農村地域に大きな影響を及ぼした。同時期の他の西ヨーロッパ諸国では、都市への人口移動が、都市人口の増加と農村地域の人口停滞をもたらすだけであった。ところがフランスでは、都市人口の増加が、農村地域の人口減少を招いてしまっていた。移動の主体が出産可能な若者たちであったために、農村の人口減少はさらに悪化した。つまりフランスでは、他の西ヨーロッパ諸国よりも、国内の人口移動がより重要な社会現象となり、政治的な論点とさえなったのである。

フランスの国内人口移動は、パリへの移動が圧倒的であった。1911年にはフランス全県のうち3分の2にあたる県から、パリへの主要な人口流出がみられた。19世紀半ばまでは、パリ周辺の諸県や、北部および東部の諸県からの移動が相対的に多く、中央部の山岳地帯の諸県からの移動も目立っていた。世紀後半以降は、パリから放射線状に伸びる鉄道網が建設されたこともあり、より広範囲の地域からパリに移住が行われるようになった。このような人口移動の変化を次に詳しく考察する。

(2) 人口移動の変化

人口移動の変化を考察するにあたっては、モックの研究に依拠し、移動の形態を大まかに4種類に分けて解説する（MOCH 1992）。地域移動（Local migration）は、コミューン（市町村）、県、地方などの比較的限られた地域内で行われる移動である。生まれ故郷との接触が可能な近距離の移動が主で、地域内の労働市場や結婚市場の状況に応じて移動が行われた。循環移動（Circular migration）は、ある一定期間、働いた後に故郷に帰る移動である。一時的あるいは季節的な出稼ぎ労働がこの移動に属し、遠距離の移動も行われた。次に、連鎖移動（Chain migration）は、目的地にすでに住んでいる親族や同郷人が「受け皿」となり、新たにやってくる人々に、仕事や住居の手助けをする移動

形態である。連鎖移動が機能している場合は、一定地域から一定地域への移動ルートが形成された。例えば連鎖移動には、夏の一定期間、パリのよう大都市で働いた後に、帰郷せずにそこに定着した建築労働者などが含まれる。他方、職業移動 (Career migration) では、家族や故郷との関係よりも、雇用制度に則して移動が行われた。職人組合の巡歴や、教会関係者、教師、公務員、裁判官などによる移動がこれに該当した。

この4種類の移動形態は、17、18世紀にもすでに存在していたが、19世紀に入り、それぞれの移動形態の重要性が変化した。地域差はみられたものの、17、18世紀に支配的であった地域移動の重要性は維持されながら、19世紀半ばまでは循環移動が最も広まった。出稼ぎ労働が主であった循環移動は、ナポレオン時代以降に増えた小土地所有者の生活様式に見合った移動形態であった。彼らは故郷の土地を離れたくないが、税金は払わなくてはならず、娘や姉妹の持参金も蓄える必要もあったので、一時的あるいは季節的な出稼ぎ労働を行ったのである。

しかし、19世紀後半には、循環移動から連鎖移動への変化が顕著になった。出稼ぎで都市にきた人々も、故郷から家族や親族、知り合いの同郷人を徐々に呼び寄せた。親族や同郷人がすでにパリのよう大都市に定着している場合、故郷の多くの若者が都会の生活に憧れを抱き、鎖のように次々と移動する連鎖的な移住が拡大した。職業移動は、教会関係者や職人組合による移動が減少していく一方、国家行政が整備させるにつれて、公務員や教師などの移動が増大した (DUPÂQUIER 1988)。

こうした移動形態の変化の中で、女性の移動も明らかに増加した。地域移動においては、女性は常に重要な存在であったが、他のすべての移動形態に関しても19世紀の間にその重要性が高まった。例えば、フランス中央部の山岳地帯に住んでいた石工の妻や娘たちは、夫や親族が住む大都市へ徐々に移住するようになった。職業移動に関しては、小学校の教師であった女性が、故郷より遠く離れた別の村や町の学校に配属された。より一般的には、19世紀の若い女性は、女中や針仕事などの職が得られる大都市に魅了された。後に考察するように、19世紀末のパリでは、女中が増加したこともあり、女性人口の割合が男性人口の割合を上回っていた。19世紀に生まれた若い女性たちは、彼女たちの母親よりも遠くに移動するようになっていたのである。

最後に、19世紀の移動形態の変化に関して最も重要な点は、それぞれの移動形態の範囲が拡大し、それにともない移動を行う人々の数もかつてない程増大したことであった。この人口移動の大幅な量的変化のゆえに、従来の研究では19世紀があたかも移動の出発点であるかのように捉えられていたのであった。次節では、19世紀フランスの人口移動において、圧倒的に移動が集中していた首都パリの急激な人口増加と、その人口吸引力の諸要因、農村からの人口流出の諸要因について概説する。

2. 19世紀パリの人口吸引力と農村からの人口流出

(1) 19世紀パリの急激な人口増加

19世紀以前のパリの人口は、非常に緩慢に増加していた。1675年から1788年にかけての人口増加は、自然増 (出生数と死亡数の差) によるものであったが、毎年平均1%にも満たない増加率であった。続くフランス革命期には、死亡率の増加や徴兵、6万人の貴族・教会関係者の亡命などにより人口が減少した。ただし、この時期にすでに北部地方から18万人の人口流入がみられ、人口減少はある程度相殺された。そして、19世紀前半にパリは急激な人口増加を経験することになる。

1801年から1851年の間に、パリの人口は約55万人から100万人へと2倍も増加した。とりわけ1831

年から1836年の間は、1832年にコレラが大流行したのにもかかわらず、10%の増加率で人口が増大した。前述したように、人口の急増はその大半が社会増（地方からの人口流入）によるものであり、パリ周辺の諸県や、北部および東部の諸県からの人口流入が相対的に多く、中央部の山岳地帯の諸県からの流入も目立っていた。（MARCHAND 1993、長井 2012年）。

鉄道網が発展した19世紀後半は、より広範囲の地域からパリに移住が行われた。その結果、1851年から1856年の間に、パリの人口は19世紀中で最も高い増加率（20.48%）に達した。パリはすでに市域外の郊外に拡大し続けていたが、1860年に周辺の郊外地域が併合された。1901年には270万人もの人口をパリは抱えることになった。

こうしてパリの地方出身者の割合は1833年に約40%、1861年には60%にまで増加した。移住者の男女の割合に関しては、19世紀前半は若い男性が中心であり、パリ人口全体でも男性人口が女性人口を上回るようになった。世紀後半は次第に女性人口が回復し、世紀末には女性人口が男性人口を再び上回った。これは、移住の主体が徐々に男性から女性に変化していったためであった（CHEVALIER 1950）。

（2）パリの人口吸引力

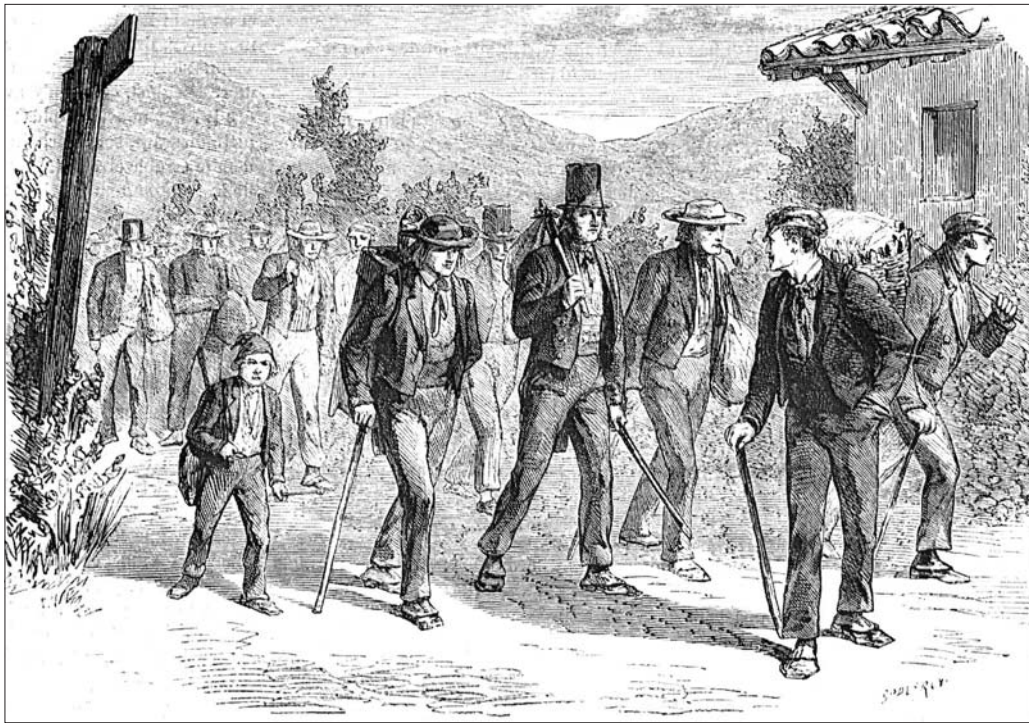
パリが非常に多くの移住者を引きつけた要因としては、豊富で規則的な雇用機会と、その賃金水準の高さが最初に挙げられる。19世紀のパリ経済においては、絶えず拡大し続ける消費市場がこのような雇用機会を生み出していた。特に七月王政期（1830-1848年）と第二帝政期（1852-1870年）のパリ大土木事業により、労働力需要がかなり高まり、大規模な人口流入が引き起こされていた。そして、大量の人口流入による衣・食・住の需要を満たすために、さらに新たな労働力需要が発生し、この過程が繰り返されていったのである（木下 1983年）。

19世紀前半のパリ消費市場は、建設や衣類産業に関する職種を中心に、季節的あるいは一時的な労働力を求めており、移住者にとっては出稼ぎの移動形態が最適であった。また、貧しい移住者に割り当てられた仕事は、建設や運搬などの力を必要とする職種が多かったために、男性の労働者が必然的に増加した。世紀後半は、建設現場では技術改善にともない冬場も働けるようになり、整備された大通りでは行商が禁止され商店が増えていった。こうした変化にともない、季節的・一時的ではない、定住を前提とした移住が多く行われていく傾向にあった。

鉄道も19世紀後半以降、パリへの移住を促進した。それまでは、馬車に乗ってくる少数の裕福な移住者を除いては、大部分の人々が徒歩でパリに向かっていった（図1）。パリに近い諸県からの移動は女性でも可能であったが、山岳地帯のオーヴェルニュ地方やリムーザン地方などの遠方地域からの移動は男性のみの集団で行われた。村の若者にとっては、パリへの旅立ちは大人として認められるための、一種の通過儀礼のようなものであった（RAISON-JOURDE 1976、コルバン 1993年）。19世紀後半には、鉄道のおかげで女性もパリに移動しやすくなり、家族や親族が移住先でますます合流するようになった。鉄道の旅費は、大部分の貧しい移住者にとっては依然として高かったため、帰郷が徐々に行われなくなりパリへの定着が進んだ。

また、心理的な側面に関しては、パリに住む親族や同郷人の存在が重要であった。彼らは故郷に定期的に手紙を送り都市の情報を伝え、子供たちや他の村人に知らず知らずのうちに影響を与えていた。村で生まれた子供たちも都市は想像できる場所となり、将来の希望さえ託す場所となった。すべ

図1 パリに向かうオーヴェルニュ地方出身の出稼ぎ農民 (1862年)



[出所] DUPÂQUIER, J., dir., *Histoire de la population française, III, de 1789 à 1914*, Paris, 1988, pl.19.

ての移住者に該当するわけではないが、親族や同郷人がパリにすでに定着していた場合には、彼らが仕事や住居の世話をしてくれる「受け皿」となったので、新たにパリへ移住する人々の心理的負担は減ったのである (ROSENTAL 1990)。

(3) 農村からの人口流出

第1節で解説したように、19世紀フランスの人口移動は農村から大都市へと一方にのみ行われていたのではなく、より複雑な移動過程を経ていた。故郷の村から地方の中小都市をまず経てパリへ移動する場合もあれば、地方中小都市に生まれてパリへ移動する場合もみられた。各地方都市の社会経済的状況を詳細に考察することは困難であるので、農村の一般的状況を概観しながら人口流出を促した諸要因について解説する。

他の西ヨーロッパ諸国と比較すると緩慢ではあったが、19世紀前半のフランス人口は増加傾向にあった。また、都市人口（フランスでは2,000人以上の集住地）の増加率が農村人口のそれをすでに上回っていたとはいえ、1840年代までは農村人口も増加し続けていた。大部分の地方都市では、目覚ましい産業の発展やそれともなう人口集中も依然として生じていなかった。このような状況で農村は人口過剰気味となり、貧困状態が広がりつつあった。(AGULHON, DÉSSERT et SPECKLIN 1976、DUPÂQUIER 1988)。

農村の人々は厳しい状況を生き抜くために、冬の農閑期に家内工業に従事した。しかし、こうした副業が不足していた地域では、一時的あるいは季節的な出稼ぎが行われ、都市へのルートと、他の農村へのルートとに大まかに分かれていた。都市への移動は、パリのような発展している大都市に豊富な建設業の仕事や、プティ・メティエと呼ばれた行商や運搬に関する様々な仕事に引きつけられたためであった。例えば、王政復古期（1814-1830年）にエトワール広場付近に新しい街区が作られた際

には、建設業の需要が増大し、多くの労働力が求められた。新街区の誕生後は、生活に必要な水売りや運搬人などが新たな活動の場を得ることになった。このような状況は、大通りでの行商が禁止される世紀後半まで続いた (RAISON-JOURDE 1976)。

他方、農村への移動は広範な地域で見受けられたが、農業に関わる多様な仕事を得る目的で行われていた。ブドウの収穫や小麦の刈入れの時期には、人手不足のために賃金が上昇し、他の農村や町から多くの人々が働きにきていた。また、じゃがいもや甜菜などの大量生産が普及するにともない、季節的な労働力の需要が新たに高まっていた。たとえ農地を所有していたとしても、より高い賃金に引きつけられ農業労働者となり多くの人々が移動した。世紀半ばには、そうした季節的移動を繰り返した農業労働者の数が、男性は約26万人、女性は10万人に上っていたのである (MOCH 1992)。

しかしながら、農村家内工業や季節的な農業労働めぐる状況は、1830-1840年代から徐々に変化していった。農村家内工業は、都市地域での工場生産の拡大や鉄道による地域経済の変化などが原因で、労働力需要が縮小し衰退に向かった。季節的な農業労働に関しても、機械の導入が広まるにつれて、収穫期の雇用が制限されたり、冬の失業が悪化したりした。パリ周辺のセーヌ県の農村地域では、1830年代からすでに蒸気脱穀機が使用され始めていた。

このような状況下で、世紀後半にパリや地方大都市が発展を遂げると、農村はますます魅力のない場所となっていった。そして1880年代の農業大不況以降は、国内全体で都市への移住がさらに活発化したのである。

3. 家族・親族・同郷人関係の機能と限界—19世紀パリの地方出身者の事例—

(1) 家族・親族関係の有効性

前節では、19世紀パリの急激な人口増加を概観し、その人口吸引力と農村からの人口流出の諸要因について解説してきた。パリが非常に多くの移住者を引きつけた要因としては、豊富で規則的な雇用機会などの経済的側面に加えて、心理的側面の問題から、パリに住む家族や親族、同郷人の重要性に関しても言及した。本節ではより具体的に、フランス北西部のノルマンディー地方出身者の家族・親族関係と、中央部の山岳地帯に位置するオーヴェルニュ地方とリムーザン地方出身者の同郷人関係、女中として働いていた独身の女性移住者の家族・親族・同郷人関係を比較しながら、こうしたネットワークの機能と限界を検討する。新たにパリへ移住してくる人々に仕事や住居の手助けをする「受け皿」となった家族・親族・同郷人関係は、如何なる条件において有効に機能していたのか、限界や欠点はどのような状況で露呈していたのかについて明らかにしていきたい。

第一に、家族・親族関係が有効に機能していた例として、ノルマンディー地方出身者の適応過程と社会的変化を考察する (YAOUANQ 1980)。ノルマンディー地方出身者は、大規模に流入してきたパリ周辺の諸県や、北部および東部の諸県からの出身者と、おそらく同様の傾向の適応過程を経たと考えられる。それはノルマンディー地方出身者が、個人的あるいは小家族で移住する傾向にあり、職業の面でも山岳地帯出身の移住者のように結束の固い専門集団を形成することはなかったからである。彼らは職業的に分散し、地方都市の出身者が大半を占め都市環境にも慣れていたので、パリへの同化は割合に容易であった。パリ住民とほとんど見分けがつかなくなってしまう場合も多かったのである。

こうした点を程度の差はあるものの、職人の親方もしくは商店主として1850年以前に成功を収めた

表1 ノルマンディー地方出身者の出自

父親の職業分類	人数 (372人中)	%	合計
(農村出身者)			
日雇い労働者	22	5,91	
農民	95	22,53	
労働者・職人	42	11,29	
商人	24	6,45	183
(都市出身者)			
日雇い労働者	36	9,61	
労働者・職人	69	18,54	
商人	84	22,61	189

図2 尊属 (●) を持つノルマンディー地方出身の商店主 (○) (1840年頃)



[出所] YAOUANQ, J. L., "Parenté, mariage, fécondité : Quelques aspects de l'immigration normande dans la première moitié du XIX^e siècle", *Ethnologie française*, vol.10, no.2, 1980, pp.147, 149より作成。

ノルマンディー地方出身者372人の出自から分析してみたい。出生証明書と婚姻証明書の調査結果から、出身地の父親の職業が判明している(表1)。まず指摘しておかなければならないのは、わずかな差ではあるが、都市出身者が農村出身者を上回っている。19世紀前半のパリに関する最近の研究でも、地方都市の出身者が多い傾向が同様に確認されている(RATCLIFFE et PIETTE 2007)。このノルマンディー地方の都市出身の移住者には、商人の息子が最も多数であり、一方、農村出身の移住者に関しては農民の息子が一番多くなっている。仮に農民や日雇い労働者の息子が故郷の農村にとどまっていた場合、商店主となることはおそらくなかったであろう。

372人のうち111人には、パリに少なくとも1人以上の尊属(伯父・叔父)か年上の兄(義兄)、従兄が住んでおり、大部分が職人であるか商売を営んでいた(図2)。新たにパリにきた移住者たちは、年上の家族や親族がすでに築き上げていた人間関係を利用し、困難なく住み着き、仕事を覚え、結婚さえも取り結んでいた。これに対して、家族・親族関係のような「受け皿」を持たなかった移住者たちは、より困難な状況を余儀なくされた。家族・親族関係を持つ移住者は平均3～5年で雇用主(職人の親方が商店主)になれたが、家族・親族関係を持たない移住者は平均7～9年とより遅れて雇用主になることを強いられ、その後の子孫の社会的地位にまで影響した。また、結婚に関しても、家族・親族関係を持つ移住者は平均27～28歳で結婚していたのに対し、これらの関係を持たない移住者は平均31～32歳で結婚するなどの差が生じていたのである。パリに住む家族や親族の存在が、移住者にとって成功の絶対条件ではなかった。それでも、人的ネットワークの機能を受容できなかった移住者は、雇用主にまではどうもかなれたが、ブルジョワと呼ばれる程の裕福な暮らしをできた人はごく稀であった。

372人のうち独身者はわずか7人であった。これは商売や職人の仕事で、妻の会計管理の能力が必要とされたからであった。このノルマンディー地方出身者372人は、同郷人以外の女性との結婚を好む傾向にあった。75%以上もの移住者が同郷人以外の女性と結婚しており、このような結婚に対する態度は、次項で紹介するオーヴェルニュ地方出身者とは大きく異なっている。ノルマンディー地方出身者は、とりわけパリ生まれの女性との結婚を好む傾向にあった。そうした「結婚戦略」は、新たにパリにきた移住者がよく用いる同化手段の一つであったのである。

ノルマンディー地方出身者の事例で見受けられた家族・親族関係の有効性は、同郷人どうしの結束

が固い地方出身者の集団内でも同様に機能していた。例えば、オーヴェルニュ地方出身の屑鉄商に関しては、パリに到着したばかりの若い移住者が、すでに現地に定着していた年上の伯父（叔父）や従兄に雇われるのは非常に幸運なことであった。当然すべての場合に該当するわけではないが、こうした若い移住者は営業財産を早めに受けることが期待でき、親族と一緒に大きな取引にも参加することができた。そして、単独では決して成し得なかったその重要な取引に成功した場合、社会的上昇を遂げることに繋がったのである（RAISON-JOURDE 1976）。

（2）同郷人関係の有効性

次に、家族・親族関係も内包していた同郷人関係が有効に機能していた例として、上記のオーヴェルニュ地方出身者の適応過程と社会的変化を中心に考察する。オーヴェルニュ地方出身者の同郷人関係は、リムーザン地方出身者の同郷人関係と同様に、専門的な職業集団を形成していたので、他の地方出身者の結束よりもはるかに強かった。特に19世紀前半は、パリとは異なる文化的背景を持つ山岳地帯の出身者は、職業集団でしばしば行動していたので、実際の数よりもその存在が目立っていた。この時期のオーヴェルニュ地方出身者の専門的な職業は、金物屋、屑鉄屋、屑屋、水売りなどで、行商人として商売を始め、店を構えようとした時に同郷人どうしのつながりが非常に有効となった。店を開いた後は、そこが故郷から新たにやってくる人の受け入れ先となった。こうした都市社会への適応過程を世紀前半と後半に分けて、より詳しく検討してみたい。

19世紀前半においては、金物屋と屑鉄屋とを兼ねた専門的な職業集団がパリで最初に成功を収めた。本来この職業は、農民が冬の間に行っていた行商の仕事で、古くなった鍋を回収したり修繕したりしていた。17、18世紀からすでに行商は地域内で実践されていたが、パリのような遠隔地への移動は、家父長制度に基づく組織化された集団で行われた。産業化が進むパリでは、金属や銅などの取引が増大し、この集団は金物屋としてよりも次第に屑鉄屋としての性格を強めるようになっていった。街中を動き回って鉄や銅などを回収していた屑鉄屋のなかには、1830年頃から徐々にごく小さな店を構えようとする者が現れてきた。しかし、彼らの貯金は僅かであったので、店を開くのに借金をすることを余儀なくされた。この時に職業集団の親族や同郷人のネットワークが効力を発揮した。オーヴェルニュ地方出身者は、同じ村などの同郷の女性との結婚をいつまでも好む傾向にあった。それは妻がもたらした持参金代わりの土地が、他の同郷人からする借金の担保として役立ったためであった。店を開いた後、一時的に商売の危機に陥った時にも、妻の持参金代わりの土地を、職業集団内のより裕福な同郷人に売却することが可能であった。相互扶助的な機能を果たしていた同郷の職業集団に属していたからこそ、首都から500キロメートルも離れた土地を売れたのであった（RAISON-JOURDE 1976）。

19世紀後半においても、同郷婚を中心とした同郷人関係の有効性は維持されていた。商業が特に発展した第二帝政期には、オーヴェルニュ地方出身者はカフェや酒場などの飲食店や、様々な小売店を営むようになった。これは水売りや行商などのプティ・メティエに従事していた者たちが、徐々に店を開いたからであった。このような定住を前提とした職業への変化は、パリの新たな都市環境によって引き起こされていた。世紀後半のパリでは馬車や乗合馬車などの交通量がさらに増大し、都市計画に基づいた大通りが建設されたために、プティ・メティエの活動の場が制限、規制されていった。大通りに住む裕福な住民たちも、近代的な設備を住宅に整えたので、かつての「騒がしい」呼売りを必

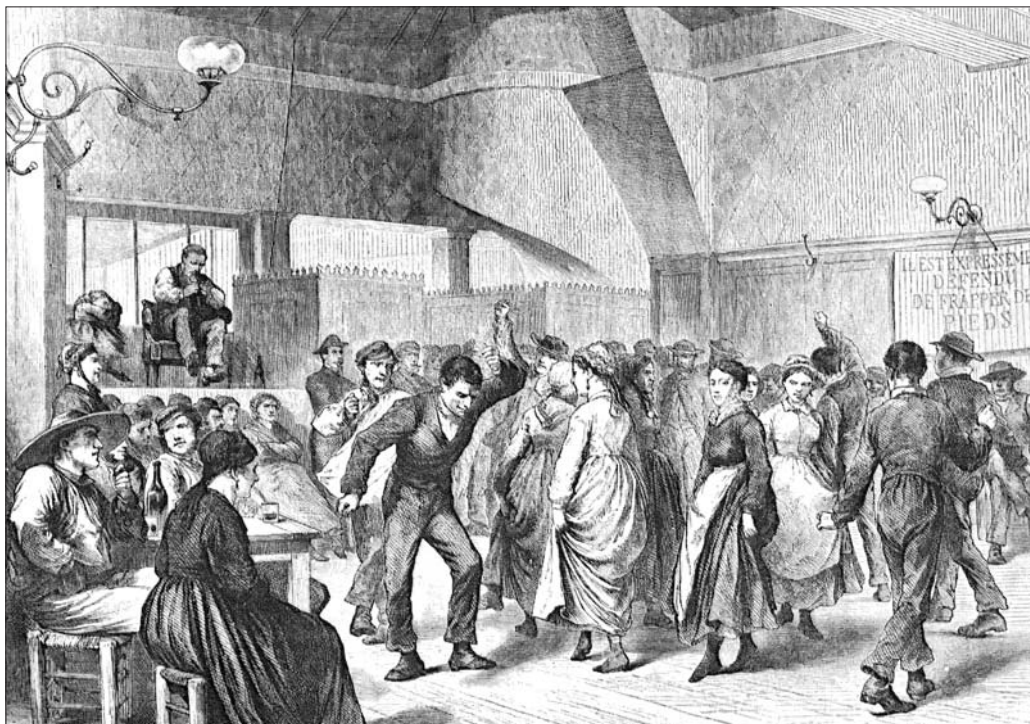
要としなくなっていた。他方、この時期には、パリの終着駅をめざして故郷の妻や親族が続々とやってきていた。そのため、行商だけでは生活が成り立たなくなり、より儲けがあり安定している小売業の世界をオーヴェルニュ地方出身者は目指すようになったのである。

19世紀前半の金物屋・屑鉄屋の例でみられた同郷婚の伝統は、小売業の世界では次のように機能していた。オーヴェルニュ地方出身の商店主は、つらい日々の仕事に耐えることができ、社会的上昇も気にかけている労働者階級の同郷の女性を妻として選んだ。こうした結婚に対する態度は、パリ出身の商店主が、より裕福なブルジョワの女性との結婚を好んだ傾向とは対照的である。そして、同郷の絆で結ばれたカフェや酒場などの飲食店には、給仕として雇ってもらうために故郷から親族や知人が訪ねてくることになった。

結果として、あくまでも集团的傾向ではあるものの、小売業を中心としたオーヴェルニュ地方出身者の専門的な職業集団は、同郷人のネットワークを有効に活用することで、集団全体として社会的上昇を遂げることになった。この社会的上昇の要因としては、同郷人の結束に加えて、小売業の職業の性質も大きく影響していた。例えば、カフェや酒場などの飲食店に関しては、少ない資金でも郊外に小さな店を開くことができた。客の労働者は平日の仕事後や日曜日だけではなく、月曜の日中まで酒を飲み続けてくれたので、比較的安定した利益を確保できた（喜安朗 1982年）。

一般的に移住者にとって、酒場は都市のルールを身につける場であり、新参者の同化において大きな役割を果たした（木下 2010年）。ただし、オーヴェルニュ地方出身の店主については、酒を飲みにくるパリの労働者は単に顧客でしかなく、店の成功によるパリへの定着のほうが大切であった。そうした態度は、建築関係の仕事に多く携わっていたリムーザン地方出身者の若者たちが、酒場でパリの労働者と接触し政治意識に目覚めていったのとは大きく異なる。

図3 パリにおけるオーヴェルニュ地方出身者のダンスホール（1870年頃）



〔出所〕 DUPÂQUIER, J., dir., *Histoire de la population française, III, de 1789 à 1914*, Paris, 1988, pl.20.

以上のようにオーヴェルニュ地方出身者たちの適応過程と社会的変化を考察してみると、同郷人のネットワークと彼らが集団として選択した職業の性質が、パリへの安定的な定着を容易にしていたことが明らかになった。それでも、19世紀パリの移住者全体では、同郷婚を維持したのは特殊な態度であった。それゆえ、パリ住民やパリ社会に同化した地方出身者たちからは、オーヴェルニュ地方出身者の職業集団は閉鎖的であるとみなされていた。オーヴェルニュ地方出身者たちは、彼らのダンスホールにしか行かず、パリの娯楽、風習、言葉もいっさい受け入れないとも考えられていた(図3)。オーヴェルニュ地方出身者にとっては、そこはパリの労働者たちに馬鹿にされない、心休まる男女の出会いの場であったのである(フォール 1999年、BARBICHON 1980、RAISON-JOURDE 1976)。

(3) 家族・親族・同郷人関係の限界

家族・親族・同郷人関係の機能が有効に機能した事例をこれまで考察してきたが、この人的ネットワークには同時に限界や欠点もあった。この点に関しては現在でも研究に進展があまりみられないが、リムーザン地方の同郷人関係と、女中として働いていた独身の女性移住者の家族・親族・同郷人関係から検討を試みてみたい。

リムーザン地方出身者は建築関係の仕事、特に石工としてパリに19世紀以前から出稼ぎにきており、専門的な職業集団を形成していた。オーヴェルニュ地方出身者と同様に、パリにおいて集団で行動する彼らの存在は、実際の人数よりもひととき目立っていた。石工の職業集団は、新たにパリへきた同郷人を彼らが住む共同部屋などに受け入れ、最初の仕事を世話していた。しかしながら、建築業界の仕事は、いったん終わればそれきりであったり、大請負業者の影響力が強く独立が難しかったりしたために、職業集団がパリへの安定的な定着を促すようには機能していなかった。石工という職業は、故郷の小土地所有を前提とした出稼ぎ労働には適していたが、移住先への定着には小売業よりも不安定で永続的ではなかったのである。

同郷人の結束が強かったリムーザン地方出身者の専門的な職業集団は、鉄道網の発展や建築業界の競争の激化などによって、ネットワークの有効性がますます乏しくなっていった。家父長的な組織で実行されていた、パリに向けての徒歩での集団移動の時代は終わり、鉄道で容易に移住が行われるようになった。こうして首都へ上ってきたリムーザン地方出身の若者たちは、読み書きや計算の能力を身に付け、同郷の職業集団から抜け出し始めた。また、同郷者とのつながりよりも、仕事場や酒場、街區で頻繁に接するパリの労働者との連帯を大切に思うようになった。他方、古くから出稼ぎを行っていた年輩のリムーザン地方出身の石工たちは、都市文化に対する反発から抜けきれずに、社会的下降を続ける傾向にあったのである(GAILLARD 1980、コルバン 1993年)。

リムーザン地方出身者に関しては、建築業界の職業の性質が原因で、オーヴェルニュ地方出身者の小売業の場合とは異なり、同郷人関係が有効に機能していなかった。このように地方出身者が選択した職業の性質が、家族・親族・同郷人関係の機能を左右する例は、家内奉公の職においても確認されている。

まずこの職業の一般的状況から説明すると、19世紀には女性の労働市場が発展したが、家内奉公人、女中はそこでかなり特殊な位置を占めていた。1856年時点で女性労働市場の3分の1は女中からなっており、パリの成人女性8人に1人を占めていた。彼女たちの特徴は、他の職業と比べて地方出身者の比率が非常に高いことで、約95%が地方出身者であった。当時、女中は道徳的に良くない評判があっ

たが、最近の研究ではそれが新聞の報道などにより誇張されたものに過ぎないことが明らかにされている (RATCLIFFE et PIETTE 2007、木下 2010年)。また、パリ貯蓄銀行の預金者の分析で、彼女たちのうち1846年で57%、1856年で54%が口座を持っていたことが判明している。貯蓄の主要な目的の一つは、結婚するための持参金をつくることであった。彼女たちの大部分は、女中としての仕事を永続的な仕事として考えるのではなく、結婚への一つの飛躍台とみなしていた。一般的に女中は悲惨な状況にあったが、彼女たちの5分の4は貧窮状態をまぬかれており、規則的な生活を送っていたのである。

19世紀マルセイユに関する研究においても、地方からの女性移住者が女中として働いた場合、雇用主のブルジョワの男性かその息子と結婚して、社会的上昇を遂げる機会が増えたことが実証されている。あるいは結婚に至らなくとも、農村出身の女性移住者はブルジョワの家庭で保護的な環境に置かれ、都市文化を身につけることができた (SEWELL 1985)。

ところが、この女中の職場は、女性移住者にとって危険な側面もあった。というのは、パリに女中としての仕事を求めにきた地方出身の独身女性は、最初は親族や同郷人の家にしばらく泊めさせてもらったが、いったん女中の職場が見つかると、彼女たちは同郷の保護者たちと離れて住むことになったからである。親族や同郷人の保護や監視が行き届かない女中の仕事場では、独身の女性移住者は雇用主のブルジョワの男性やその息子、その家に雇われている御者などからの誘惑の犠牲になりやすかった。独身の女性移住者が妊娠した場合には、その親族や同郷人が相手の男性に結婚を強制させる力はほとんどなかった。当時の法律も、未婚の母親が子供の父親を捜すことを禁止していた。そして、妊娠し解雇された独身の女性移住者は、助産婦も雇うことができずに、ラ・マテルニテなどの無料の産科病院に担ぎ込まれたのであった (FUCHS and MOCH 1990)。

このような女中の例は、この職業従事者全体からすると僅かなものであった。しかし、家族・親族・同郷人関係の機能の面に関しては、女中の職場はその人的ネットワークの限界と欠点を露呈していたと言えよう。リムーザン地方出身の石工たちとは異なるかたちで、地方出身者が選択した職業の性質が、家族・親族・同郷人関係の機能に大きな影響を及ぼしていたのである。

おわりに

これまで日本ではその成果が十分に紹介されてこなかった、オーヴェルニュ地方出身者に関するレゾン・ジュルドの研究や、1980年の『フランス民族学』に掲載されたパリの地方出身者の歴史に関する研究に主に依拠して、家族・親族・同郷人のネットワークの機能と限界について明らかにしてきた。本稿は地方単位の集団的傾向を考察したものであり、移住者全体を考えれば、19世紀パリへの適応過程はより複雑であった。レゾン・ジュルドがすでに指摘していたように、例えば、山岳地帯のオーヴェルニュ地方出身者は、比較的若い年齢で農村から直接パリにきて、集団で生活していたと思われるが、具体的にはこうした集団生活を送っていたのは、主としてこの地方のカantal県出身者たちであった。隣接するピュイ・ド・ドーム県では、クレルモン・フェランなどの地方中心都市を中継地点にして移住者たちはパリに向かっていたので、都市的な環境に慣れている者も多かった。彼らの年齢は30～35歳くらいで、すでにある程度の蓄えがあり、仕立屋や装身具商、パン屋などの様々な都市的な職業に従事する人たちであった。そのうえ、ノルマンディー地方出身者と同様に、ピュイ・ド・ドーム県出身者はパリであまり集団行動をとることはなく、個人的あるいは小家族で生活する傾向に

あった。つまり、専門的な職業集団を形成し、パリ住民の注意を引きつけていたのは主にカンタル県出身者であったのである (RAISON-JOURDE 1976)。

こうした県単位の集団的傾向の分析から、さらに詳細に移住者の適応過程を考察しようとする場合には、それぞれの地方出身者の属性を考慮しなくてはならない。移住者の社会的出自・地位、年齢、性別、土地所有の状態などが、適応過程と社会的変化に相違をもたらしていた。ただし、19世紀パリの移住者すべてを、このような点を考慮しながら分析するのは容易なことではない。やはり一定の分析の枠組みは必要となるであろう。

確かに個別の事例を取り上げてそれを詳細に研究しても、その特殊性なり独自性が強調されるばかりで、そこに加わらなかった人々がどのように生きていたのかという問題が残ってしまう。(長井 2009年、BARBICHON 1980、ROSENTAL 1990) しかしながら、個別事例の比較検討によって、地方出身者が選択した職業の性質が、家族・親族・同郷人関係の機能が有効に働くか、あるいは限界を露呈するのかに大きく影響していたことは明白となった。当然、職業の選択の余地がなかった移住者も多数いたと考えられるとはいえ、本稿で分析したノルマンディー地方、オーヴェルニュ地方、リムーザン地方出身者以外の移住者についても、彼らを選択した職業がパリ社会への定着の具合を左右していたであろう。

非常に多くの地方出身者が住み着いたパリは、19世紀から20世紀にかけて都市基盤を徐々に整えていった。19世紀後半以降、市内に整備された都市公共交通網は、これまで分析してきた人的ネットワークのあり方にも変化を及ぼしていたに違いない。これらの検証は今後の課題としておきたい (Daumas, Fontanon, Jigaudon et Larroque 1977)。

参考文献

- AGULHON, M., DÉSSERT, G., et SPECKLIN, R., *Histoire de la France rurale, III, Apogée et crise de la civilisation paysanne, 1789-1914*, Paris, 1976.
- BARBICHON, G., "Provinciaux et provinces à Paris : Propositions pour l'analyse", *Ethnologie française*, vol.10, no.2, 1980.
- CHEVALIER, L., *La formation de la population parisienne au XIX^e siècle*, Paris, 1950.
- CHEVALIER, L., *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX^e siècle*, Paris, 1958 (ルイ・シュヴァリエ、喜安朗、木下賢一、相良匡俊訳『労働階級と危険な階級』みすず書房、1993年)。
- CRIBIER, F., *Une génération de Parisiens arrive à la retraite*, Paris, 1978.
- DAUMAS, M., FONTANON, C., JIGAUDON, G., LARROQUE, D., *Analyse historique de l'évolution des transports en commun dans la région parisienne de 1855 à 1939*, Paris, 1977.
- DUPÂQUIER, J., dir., *Histoire de la population française, III, de 1789 à 1914*, Paris, 1988.
- FARCY, J.-C., et FAURE A., *La Mobilité d'une génération de Français : Recherche sur les migrations et les déménagements vers et dans Paris à la fin du XIX^e siècle*, Paris, 2003.
- FUCHS, R. G. and MOCH, L. P., "Pregnant, Single, and Far from Home: Migrant Women in Nineteenth-Century Paris", *The American Historical Review*, vol.95, no.4, 1990.
- GAILLARD, J., "Les migrants à Paris au XIX^e siècle : Insertion et marginalité", *Ethnologie française*,

vol.10, no.2, 1980.

MARCHAND, B., *Paris, histoire d'une ville : XIX^e-XX^e siècle*, Paris, 1993.

MOCH, L. P., *Moving Europeans: Migration in Western Europe since 1650*, Bloomington, 1992, 2003.

RAISON-JOURDE, F., *La colonie auvergnate de Paris au XIX^e siècle*, Paris, 1976.

RATCLIFFE, B. M., et PIETTE, C., *Vivre la ville : Les classes populaires à Paris (1^{ère} moitié du XIX^e siècle)*, Paris, 2007.

ROSENTAL, P.-A., "Maintien / Rupture : Un nouveau couple pour l'analyse des migrations", *Annales E.S.C.*, vol.45, no.6, 1990.

SEWELL, W. H. Jr., *Structure and Mobility: The Men and Women of Marseille, 1820-1870*, Cambridge, 1985.

YAOUANQ, J. L., "Parenté, mariage, fécondité : Quelques aspects de l'immigration normande dans la première moitié du XIX^e siècle", *Ethnologie française*, vol.10, no.2, 1980.

木下賢一「19世紀パリ民衆の世界—ルイ・シュヴァリエの歴史人口学的研究を中心に—」『駿台史学』第59号、1983年9月。

木下賢一「19世紀パリ民衆史再考」『駿台史学』第139号、2010年3月。

喜安朗『パリの聖月曜日—19世紀都市騒乱の舞台裏』平凡社、1982年。

國府久郎「マルセイユにおける移住現象（1806年～1911年）—国内移住から『移民』の時代へ—」『駿台史学』第114号、2002年2月。

アラン・コルバン、小倉孝誠、野村正人、小倉和子訳『時間・欲望・恐怖—歴史学と感覚の人類学』藤原書店、1993年。

長井伸仁「19世紀後半のパリにおけるカトリック教会と入移民—地方出身者を中心に—」『関学西洋史論集』第31号、2008年3月。

長井伸仁「都市の入移民と文化—19世紀パリの事例から考える—」『史潮』新66号、2009年11月。

長井伸仁「都市における移住者と文化—19世紀パリにおける地方出身者の事例—」『史林』第95巻、第1号、2012年1月。

アラン・フォール、長井伸仁訳「彼らはいかにして『パリ人』となったか—19世紀末パリ移住民の統合をめぐる—」『西洋史学』第195号、1999年。